

日本英文学会 北海道支部

第 71 回大会プログラム

日時：令和 8 年 10 月 18 日（日）

会場：札幌学院大学 新札幌キャンパス

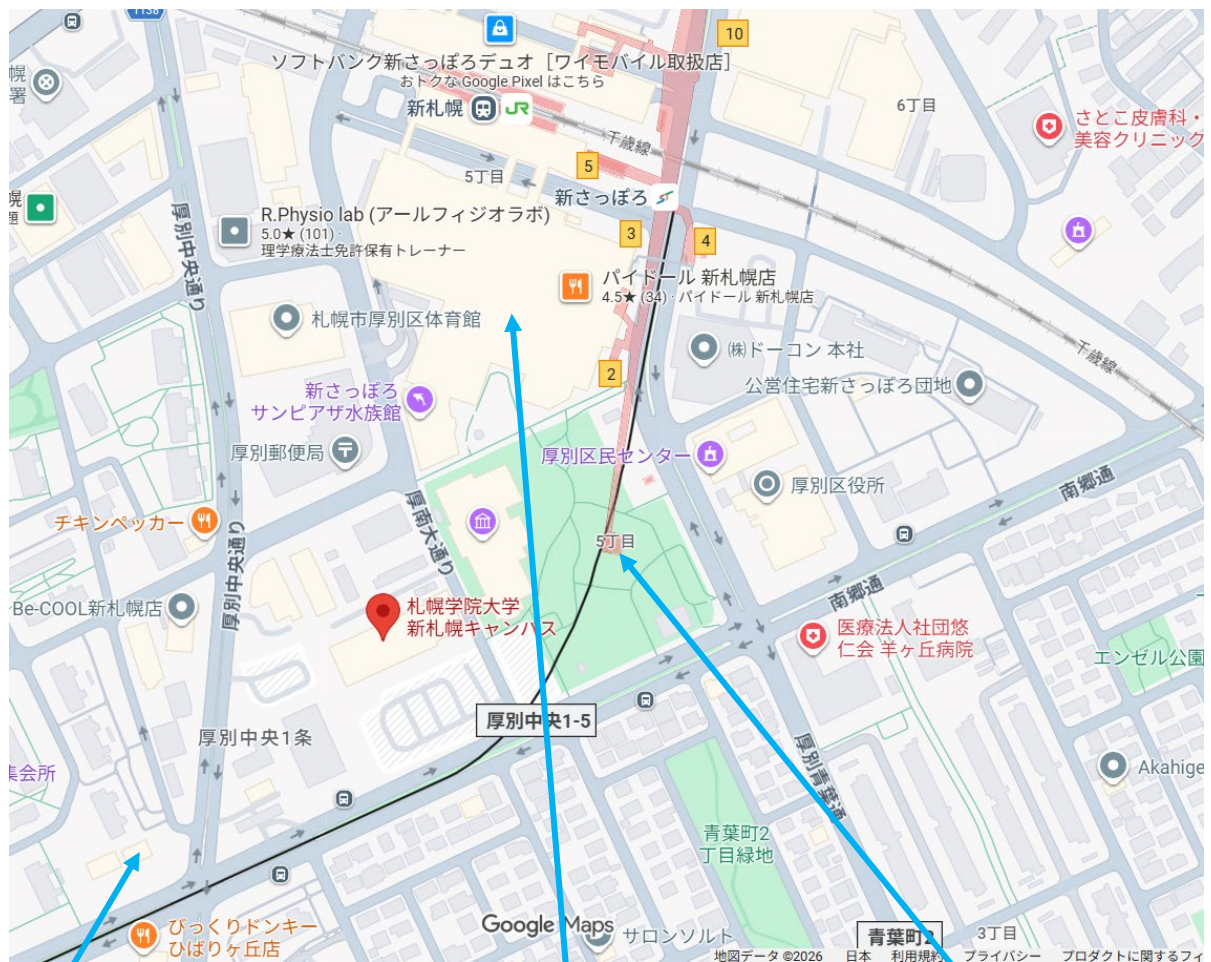
（北海道札幌市厚別区厚別中央 1 条 5 丁目 1-1）

協賛：札幌学院大学

〈会場アクセス・地図〉

- ・ JR「新札幌駅」から徒歩 5 分。
- ・ 市営交通・地下鉄東西線「新さっぽろ駅」1 番出口から徒歩 1 分。

※当施設には有料駐車場しかございません。最寄りの公共交通機関をご利用下さい。



ローソン札幌厚別中央店

AEON の B1,
Sunpiaza の B1-3
dUo-2 の B1
dUo-1 の B1, 5F
の各種レストラン

東西線「新さっぽろ駅」
1 番出口

〈懇親会のご案内〉

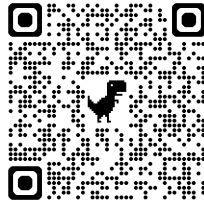
場所：カフェテリア Resto U（札幌学院大学新札幌キャンパス 1F 学生食堂）

日時：10 月 18 日（日）18:00-20:00

会費：一般会費 6,000 円、学生会費 5,000 円

出欠確認：懇親会参加希望の方は 9 月 30 日(水)までに下記フォームにてお申し込み下さい。

<<https://forms.gle/pfj6ckpoRAxoGXys8>>



〈昼食について〉

日曜日は学生食堂が定休日となっております。昼食につきましては、上記地図にお示ししたコンビニエンスストアやレストランなどをご利用下さい。

〈会場 1 F・3 F〉



※発表者・参加者控室は、3 階の 305 教室をご利用下さい。

《大会プログラム》

受付開始 (9:30~) (3階プレゼンラウンジ付近。書籍展示もあり)

開会式 (10:00~) (3階 301 教室)

開会の辞 日本英文学会北海道支部 支部長 野村 益寛

理事会 (11:45~) (3階演習室 3B)

＜文学部門＞ (3階 301 教室)

研究発表 1 (10:10-10:45)

司会 酪農学園大学 金井 彩香

「生き方の技術」から見るユートピア社会の姿—Aldous Huxley の *Island* について
北見工業大学 高城 翔平

研究発表 2 (10:45-11:20)

司会 北海道教育大学旭川校 十枝内 康隆

アイルランド兵士の語り口—Rudyard Kipling 初期短編における Tommy Atkins の話
ことばをめぐって

藤女子大学 大桃 陶子

＜語学部門＞ (3階 302 教室)

研究発表 1 (10:10-10:45)

司会 札幌学院大学 眞田 敬介

日英語オノマトペ間における音韻的類似性の客観的検討：語彙選定基準を高めて
釧路工業高等専門学校 菅原 崇

研究発表 2 (10:45-11:20)

司会 札幌大学 後藤 善久

島の効果と外在化について

旭川医科大学 三好 暢博

休憩 (11:20-13:00) (3階 305 教室やプレゼンラウンジを使えます)

＜文学部門＞（3階 301 教室）

特別講演 (13:00-14:00)

司会 札幌市立大学 松井 美穂

文学研究とプライバシー

北洋大学特任教授・北海道大学名誉教授 瀬名 波 栄 潤

＜語学部門＞（3階 302 教室）

セミナー (13:00-14:00)

司会 北見工業大学 戸澤 隆 広

削除復元条件の非対称性再考：発音されない意味と意味を伴わない発音

北海道大学 奥 聡

＜文学部門＞（3階 301 教室）

シンポジウム (14:15-16:45)

文学と謎

司会・講師 北海道大学 竹内 康 浩
講師 金沢大学 宮澤 優 樹
講師 北海道大学 朴 舜 起

＜語学部門＞（3階 302 教室）

シンポジウム (14:15-17:15)

認知言語学における「理論とは何か？」を考える—認知文法・構文文法・フレーム
意味論の観点から—

司会・講師 藤女子大学 對馬 康 博
講師 流通経済大学 貝 森 有 祐
講師 九州工業大学 阪 口 慧

総会・閉会式 (17:20-)（3階 301 教室）

閉会の辞 日本英文学会北海道支部 副支部長 松井 美穂

懇親会 (18:00-20:00)（1階カフェテリア Resto U）

＜発表要旨＞

＜文学部門：研究発表1＞

「生き方の技術」から見るユートピア社会の姿 —Aldous Huxley の *Island* について

高 城 翔 平（北見工業大学）

Aldous Huxley の *Island* (1962) はユートピア物語である。ユートピア物語はしばしば作者の理想とする社会制度を提示する場であり、その研究では描かれた制度の理念や作者の思想に焦点が当てられる。だが、それらの制度が敷かれた社会で生きる人の暮らしとは、どのようなものなのか。本発表では、この観点から *Island* の社会を総体的に分析する。

Island では仏教思想が重要な役割を果たす。その思想の一端は「真如」(Tathata, Suchness、本発表では「ありのままであること」と訳す) という用語に示されており、物事を要素へと還元して分析する西洋の科学と対置されている。本発表ではユートピアの住人の「生き方の技術」(“the art of living”) を、諸制度の理念を包括的に捉える観点として用いる。さらに、思索に留まらない Huxley の実践を知るため、妻 Laura Huxley の回顧録も参照しつつ、*Island* に築かれた理想社会での暮らしを明らかにする。

＜研究発表2＞

アイルランド兵士の語り口

—Rudyard Kipling 初期短編における Tommy Atkins の話ことばをめぐって

大 桃 陶 子（藤女子大学）

Rudyard Kipling は、イギリス文学において初めて Tommy Atkins（英国陸軍兵士）に注目した作家として知られているが、これらの作品で用いられているのは、労働者階級出身の兵士たちの特徴的な話ことば(speech)である。積極的に話ことばを取り入れたことにより、Kipling の作家としての成功が形作られたと考えられる。彼が 1889 年に 24 歳で英国での作家デビューを果たした際、インド帰りの Kipling をロンドンの文壇は「ディケンズの再来」と呼んだ。この賞賛は、両者ともに標準英語とは異なる方言や労働者階級特有の英語表現をテキストに積極的に取り入れたことから生じたと考えられる。

本発表では、初期作品の中でも特にアイルランド出身の Terence Mulvaney を中心とする三人の英国軍兵士が登場する短編に注目し、そこでのアイルランド訛りの使用にどのような意味を見出せるかを検討する。そして、それらのテキストが、一見難解のようでありながら幅広い読者に受け入れられた理由を明らかにしたい。

<語学部門：研究発表1>

日英語オノマトペ間における音韻的類似性の客観的検討：
語彙選定基準を高めて

菅 原 崇（釧路工業高等専門学校）

本研究は、日本語オノマトペと意味対応する英語オノマトペとの間に、客観的に測定可能な音韻的類似性が存在するかを検証する。予備研究では、意味対応する日英オノマトペ 537 ペアを分析、有意な音韻的類似性を確認した。ただ英語側に非オノマトペが含まれる可能性があったため、本研究では辞書的基準に基づき精査した日英意味対応オノマトペ 191 ペアを対象とした。各語を IPA へ変換し、PanPhon の feature edit distance により音韻距離を算出、ランダムペア 5000 回の平均音韻距離と比較した。結果、意味対応ペアの平均音韻距離はランダムペアより有意に小さく、72.2%のペアでランダム平均を下回った。

<研究発表2>

島の効果と外在化について

三 好 暢 博（旭川医科大学）

連続循環移動を仮定しないボックス理論において、島の効果を伝統的な意味での移動に課される制約として分析することは不可能であり、新たな視点が必要である。本発表では、当該の制約を外在化に還元するという方向性の経験的な問題を指摘し、構造的制約に由来する可能性を示すことにある。

日本語・中国語の残留 wh 構文においては、項の wh 句が島の効果を示さない一方、付加詞の wh 句は島の効果を示す。この非対称性は、単純な外在化による分析では予測できない。さらに、ブリ語の残留 wh 構文においては、付加詞の wh 句のみならず項の wh 句も島の効果を示す。日本語・中国語とブリ語の比較は、外在化による説明が困難であることを強く示唆する。本稿ではボックス理論を前提に、フェイズ主要部 C_Q がボックス化された wh 句へアクセスする際に島感受性が生じるという仮説の下で、言語間差異の統一的説明を試みる。

<文学部門：特別講演>

文学研究とプライバシー

瀬 名 波 栄 潤（北洋大学特任教授・北海道大学名誉教授）

定年退職の数年前からモヤモヤしていた文学研究とプライバシーの関係について、会場の皆様の知恵をお借りしたい。プライバシーとは、“一般的に個人や家庭内の私生活が他人に干渉されず、または他人に知られないように保護される権利や自由、およびその私的な情報”（AI 回答）のことを指す。この私的情報が文学作品では文学の誕生とほぼ同時期から堂々と披露されてきた。18 世紀英国で小説が誕生すると、登場人物の私生活描写はエスカレートする。20 世紀後半には The personal is political が謳われ、フェミニズム運動や公民権運動そしてクイア関連の文学作品では、社会構造の一部としてプライバシーがカミングアウトされる。

問題は研究者だ。登場人物だけでなく作家のプライバシーまで暴露したりする。研究とは理性的営みであると言わんばかりに特権的で、多くは自らのプライバシーをひた隠しにして、高みの見物に興じている。文学研究者がプライバシーを晒すとどうなるのか。

<語学部門：セミナー>

削除復元条件の非対称性再考：

発音されない意味と意味を担わない発音

奥 聡（北海道大学）

英語動詞句削除において-ing 形を先行詞とし、原形を削除することは可能だが(1a)、その逆はむずかしい(1b)。

- (1) a. Mary is leaving and soon John will [VP e]. ([e] = leave)
 b. ?*Mary will leave since John is [VP e]. ([e] = leaving)
- (2) 削除対象の素性構成は先行詞の素性構成の(真)部分集合でなければならない

本セミナーでは、こうした削除復元条件の非対称性を説明するために、Oku (1998)が提案した Subset Copy 原理(2)を出発点とし、先行詞と削除要素の非同一性に関して議論を深める機会としたい。具体例として、英語動詞句削除における束縛関係、日本語の取り立て詞を含む項削除、さらに(2)の反例に思われる英語動詞句削除の例と日本語の「否定呼応 negative concord」文の述語削除の例を検討する予定である。

<文学部門：シンポジウム>

文学と謎

司会・講師 竹内 康 浩（北海道大学）
講師 宮澤 優 樹（金沢大学）
講師 朴 舜 起 （北海道大学大学院博士後期課程）

文学批評は謎解きではない、という考え方があることは承知している。しかし、文学テキストを読んでいるとき、頭の中に「謎」が浮かんでこないようにするのは難しい。知性が活動しているとき、謎は必然的に生じてくるものだからである。もし逆に、謎が見えてこないならば、不安になってもいいのではなかろうか。謎に直面する人物たちを多くの作家が描き続けてきたのは、謎の発見とその解決という知性の働きに彼らが魅了されていたからに他ならない。宮澤優樹氏が論じる Henry James 然り、朴舜起氏が論じる Edgar Allan Poe 然り、そして竹内が論じる Flannery O'Connor もそうである。文学テキストの中で謎はいかに生じてくるのか、謎を解く手がかりはどこにあるのか、謎を解くと何が見えてくるのか、そもそも分析能力とは何なのか。登壇者それぞれが文学探偵を演じながら、文学テキストがはらむミステリーの現場を楽しんでみたい。

Flannery O'Connor と神の謎

竹内 康 浩（北海道大学）

人間はいかにして神の世界を垣間見るのだろうか。その瞬間を O'Connor は短編“The Turkey”で見事に描いているように思う。もちろんそれは一つの「謎」として、人間という生物にすぎない主人公の前に姿を現すのだが、まず彼がそれを認識できるか否かが問題である。何が彼の目を曇らせているのか、何に気づけばよかったのか、最終的に彼は何を経験するのか。物語中の出来事や、それを描写する文体的な特徴等をたどりなおすことで、謎の認識を可能にするメカニズムを明らかにしていきたい。それは同時に、私たち読者の問題にもなるであろう。豊饒なテキストを前にした読者の目を曇らせてしまうものは何なのか、読者は何に注意を払えば謎を発見できるのか。主人公の苦い経験を読んでいくと、読者である私たちがテキストに向き合うときにとるべき姿勢が浮かび上がってくるように私には思われるのである。

Henry James と探偵小説の邂逅：
“Owen Wingrave”の謎

宮 澤 優 樹（金沢大学）

Henry James が残した蔵書を見ると、そこには Arthur Conan Doyle による一冊の Sherlock Holmes もの、*The Valley of Fear* (1915)がある。無謬の探偵の冒険譚である Holmes ものに対し、かの探偵が世に出た 1887 年以降に James が書いた作品には、例えば “The Turn of the Screw” や *The Sacred Fount* のような、謎を解こうとする読者や登場人物を煙に巻くものが多い。両者の距離は一見して遠いように見えるが、James が一冊の Holmes ものを晩年に入手し、しかも保持していたことは事実である。James の Holmes への関心は、より早い時期にも見られる。James は “Owen Wingrave” という 1892 年の幽霊物語において、Holmes の名前を仄めかした。当時すでに一世を風靡していた探偵を暗示することにより、James は何を狙ったのだろうか。物語は、家の伝統に逆らい軍人となることを拒んだ英国人青年が、先祖の幽霊が出ると噂される部屋で謎の死を遂げるというものである。それはあたかも探偵小説の開幕のように、死体が現れた時点で幕を閉じる。James はその死を解明する試みに読者を誘うのである。本発表では、Holmes の手を借りながら結末を解説することに加え、そこから生じる別の謎についても考察してみたい。

「手紙」を Poe へと差し戻す：
“The Purloined Letter”の「手紙」の中身は何？

朴 舜 起（北海道大学大学院博士後期課程）

Edgar Allan Poe が書いた 4 つの推理作品の中で、“The Purloined Letter” (1845)だけは唯一殺人事件が起きない。そこで代わりに扱われるのは「手紙」の盗難事件だが、この作品についてこれまで書かれた様々な読解をまとめて言えば、Poe は「手紙」という郵便的な小道具を謎の中心へと持ってくることで決して固定し得ない問題を、つまり人間の分析能力の働きそれ自体という「謎」を直接に問おうとしていたようである——それも探偵と盗人の知的な交換的応酬という分析的な郵便性の内で。

しかし、するとこの作品は当然 Poe による自身の分析観についての自己解説の役割を担ってもしるはずだし、更に踏み込んで仮定すれば、Poe はそこで自分が祖であるミステリーという文学形式へと遡行的に自己言及しようとしていたのかもしれない。本発表ではラカン、デリダ、ジョンソン、アーウィン、竹内と読み継がれ（＝配達され）てきたこの作品＝手紙への分析という役割を書き手の Poe 当人へと差し戻し、この作品が既に Poe による Poe 自身の分析能力へと自己言及し、解説するテキストであったという可能性について考えてみたい。

<語学部門：シンポジウム>

認知言語学における「理論とは何か？」を考える
—認知文法・構文文法・フレーム意味論の観点から—

司会・講師 對馬 康博 (藤女子大学)
講師 貝 森 有 祐 (流通経済大学)
講師 阪 口 慧 (九州工業大学)

2020 年代後半を迎えた今、認知言語学の誕生からおおよそ 40 年（ないしそれ以上）の時を経ている。初期の認知言語学研究では、言語現象の正確な記述を目指し、それぞれの研究分野の理論的枠組みが確立された。近年では、特に、実際の使用を重視する使用基盤モデル(Usage-Based Model)の立場から、母語話者の内省を反映する作例に基づく研究に加え、コーパス等で得られる経験的データとしての実例を用いた研究へと広がりを見せている。使用基盤モデルに基づく研究は、経験的基盤を強化した一方で、理論の射程も広げてきた。こうした動向を踏まえて、理論自体を問い直しつつ現象を分析する必要がある。このシンポジウムでは、認知言語学研究のうち、特に、認知文法、構文文法、フレーム意味論の枠組みにおいて、それぞれの講師の観点から「理論とは何か？」を見つめ直し、さらに、理論を援用し、英語の諸現象の説明を試みることを目標とする。

認知文法と構文文法の理論化を問い直す
—使用基盤モデルからみた理想と現実—

對馬 康博 (藤女子大学)

本発表は、理論言語学としての認知文法と構文文法の理論化の理想と現実を使用基盤モデルの観点から問い直すことを目標とする。認知言語学研究の草創期における認知文法・構文文法による質的研究を第 1 世代とすると、2008 年頃以降の量的転回としての量的研究が第 2 世代、2010 年頃以降の社会的転回としての談話・社会言語学的研究が第 3 世代である。本発表では、世代が進んでも、第 1 世代の研究でも、使用基盤モデルの観点から現実の現象の記述を通して理想化を経て理論化が可能であることを論じる。

具体的には、「マッド誌構文」(e.g. Him become a professor!?)を取り上げる。この構文は、Akmajian (1984)が構文特性の記述を行い、Lambrecht (1990)がトピック・コメント構文と記述している。本発表では、先行研究を基に、質的研究法から認知文法と構文文法の枠組みで理想化を通じた理論化を試みる。

定式化しづらい現象はいかに理論化されるべきか
—非典型的な使役移動構文の分析を通して—

貝 森 有 祐（流通経済大学）

本発表では、非典型的な使役移動構文を対象として、構文文法による分析と認知文法による分析を比較し、後者がより有効な説明を与えうることを主張する。ここでいう非典型的な使役移動構文とは、*I emptied water into the sink* のように非選択目的語を伴うもの、および *I emptied the tank into the sink* のように目的語と経路句の間に叙述関係が成立していないものを指す。このような例は、Goldberg (1995) の「動詞と構文の役割の融合」では扱うことが難しい。本発表では、Langacker (2009) の *skewing* を用いることで、前者は構文の指定が、後者は動詞の指定が優先された例として分析できることを示す。以上の分析を通じて、認知言語学における理論化を検討するにあたっては、理論を現象に合わせるのではなく、理論を通して現象の見えにくい側面を発見することが重要であることを示す。

フレーム意味論に基づく機能語の理解に関わる知識の記述
— “*I’m on it.*” “*I’m into it.*”などを例に—

阪 口 慧（九州工業大学）

フレーム意味論は、言語の「理解」のための意味論である（cf. Fillmore 1985: 222）。この立場では、語の意味は孤立した定義によってではなく、当該表現の理解を可能にする総体的かつ有機的な知識構造、すなわちフレームとの関係において記述される。しかし、これまでの記述対象の中心は名詞、動詞、形容詞などの内容語であり、前置詞や助詞といった機能語がどのような理解の枠組みを喚起するのかについては、Litkowski & Hargraves (2021) などの研究はあるものの、内容語に比べて十分に体系化されているとはいいがたい。本発表では、この問題意識のもと “*I’m on it.*”（任せて／対応中だ）、“*I’m into it.*”（興味がある／ハマっている）、“*I’m over it.*”（もう気にしていない／乗り越えた）など、*be* 動詞に後続する前置詞句が意味的に主要な役割を担う英語口語表現を扱う。分析を通し、「理解のための意味論」というテーゼを再考し、一理論としての拡張の可能性がどこにあるかを論じる。